

室城秀之著

『うつほ物語の表現と論理』

佐藤 信 一

「うつほ物語」は不幸な作品だった。というのは、読みやすい注釈が皆無に等しかったからである。その状況を打破したのが室城先生の「うつほ物語全」であったと言ってよい。ここでは注釈によって培われた考証が息づいている。

序章「うつほ物語研究の現在の課題」では、従来の成立過程研究が御都合主義的な読者を想定することで「としかげ」「藤原の君」の二つの冒頭の矛盾を解消するのに対して、「作品を作品として読み解いてゆく」方法で「作品の根源」を捉えようとしている。序章「宴と酒と音楽と——うつほ物語論へ」は「祝祭」という観点を導入し、従来「矛盾」と考えられてきたあて宮の結婚の問題を解決する。第一章「あて宮春宮入内決定の論理」は、あて宮求婚譚の裏側に敷衍する、政治的な「家」の物語の論理を見据え、正頼たちは現実的政治的な状況判断であて宮の入内を主体的に選び取って行くことを説く。第二章「拒否される求

婚者たち——行正・仲頼・忠こそ・藤英をめぐって——は、この四人の求婚者たちの共通点を、「孤の存在として学問・技艺によって成り上がってゆこうとする人々」と捉え、あて宮求婚譚の本質と密接に結び付いていることを論じている。第一章「うつほ物語における「都市」は、若子君の「神隠し」から「うつほ物語」が都市とその周辺とを峻別する論理を持つことを述べ、源正頼の家の物語が「都市」の物語であることを指摘し、俊蔭の一族が「都市」の外側に生きるとする。第二章「うつほ物語における日常性と祝祭性」では、「うつほ物語」では行事、祝祭そのものを執拗に描写すること、その祝祭の時間は二つの異なる空間を不意に結び付け、選ばれた者だけが通ることができ、その回路はすぐに絶たれてしまうものであることが論じられる。第三章「上野の宮論——うつほ物語における祝祭の論理——」では、「藤原の君」と「嵯峨の院」で上野の宮の造型は異なることを捉え、それは、その舞台が平安京の外側であるか、内側かに拠るとして、祝祭表現の一つとして上野の宮挿話も把握すべきものとする。第四章「うつほ物語の空間——吹上の時空をめぐって——」では俊蔭の家と正頼の家の二つの「家」の物語の時間は、俊蔭の方は年齢が中心であるのに対し、正頼は季節的、年中行事的な時間であること、吹上の宮の空間が、俊蔭の波斯国漂流譚の物語空間の変相に他ならないことが論じられている。第五章「祭の使」の巻の競馬関連記事をめぐって——正頼の三条院の空間——では正頼と受領層との結びつきを説き、絵解にある「南のおとど」での競馬挙行を論証する。第一章「内侍のかみ」の巻の表現——その会話をめぐって——は、「内侍のかみ」の巻が、

帝の宮中の殿舎や清涼殿の名を用いた洒落で始発することから、「ことばの主幸者」として帝を捉え、この巻の会話文自体が独自であることを論証している。第一章「作られた過去―内侍のかみ」における「吹上の宣言」をめぐって―は、「内侍のかみ」の巻に描かれた「吹上の宣言」を、「吹上・下」ではなく「内侍のかみ」で作られた過去であることを論じ、成立過程の問題とは切り離して考えるべきであることを明らかにしている。第一章「うつほ物語の後半の始発における「蔵開き」の意味」は正頼家の「都市」の空間の充足と完成とを語る「うつほ物語」前半のあて宮求婚譚から、後半の始まりを「都市」から排除された空間の姫と翁のモノガタリに見る。第一章「蔵開・上」の巻のいぬ宮の産養関係記事をめぐって―は、「西面」の語の初出を「うつほ」に認めた上で、物語の空間の持つ意味を考察する。第一章「うつほ物語の後半の会話文」は、涼の男子誕生、それへの仲忠の産養に関する手紙の贈答で用いられる風俗歌「名取川」の引用が、物語で繰返されること、いぬ宮誕生後、それが人目を避けて会話の中で語られることなどを通じて、「実際のできごとを語らずに、当事者たちの会話を通して描くことで、一義的でない物語の読みの世界への広がりを持たせようとしている」とする。第一章「うつほ物語におけるあて宮―「宮仕へ心行く」とは、何をか言ひけむ」へ宮中への流離―」はあて宮をかくや姫の後継者と規定し、あて宮は流離とも言える宮中生活を通して、「世の中」物の心」を知った女性として変貌し、後の多くの物語における入内する姫君たちの先蹤となったとする。第一章「国譲・上」の巻の冒頭について―「枕草子」「物語は」の段

に見える「殿うつり」「国ゆづり」と関連させて―は、「蔵開下」と「国譲上」における「殿うつり」の変質を問題として、「枕草子」の「殿うつり」を「国譲・上」に相当するという見解を示す。第一章「藤壺腹皇子立坊決定の論理」は、後半の主要な話題である立坊争いの端緒があて宮求婚譚に胚胎しているとし、あて宮と嵯峨院小宮・梨壺の立坊争いの背景に、物語に描かれていなかつての立坊争いの介在を見て、そこに個人としてではなく「政治」の中で生きていかざるを得ないという新しい人間像を見る。ただ二八三頁の引用文「世間にののしりて言ふやうには」の「世間」は、「世界」の誤り。第二章「あて宮求婚譚と求婚歌群」は、一見無意味に見える求婚歌群も、求婚者たちにとつてあて宮を得ることができないのではないかという幻想をつなぎとめる「祝祭」の時空として、求婚譚そのものの表現となつていふことを説く。第二章「春日詣」の巻の和歌序をめぐって―では、従来「うつほ」の和歌には低い評価のみがなされていたが、「方法的な自覚」に裏付けられたものとする。第二章「うつほ物語の歌語について―花をさそふ風」をめぐって―は、「花風」花をさそふ風」の用例の検討を通じて、「うつほ」における引歌表現の方法化の萌芽を読み取る。第二章「あて宮求婚譚のなかの、地名を詠んだ歌をめぐって―では、あて宮関連の歌が物語の構想に無関係な、歌ことばとしての地名を背景に作られていることを指摘する。第三章「源正頼は、「左大将」か、「右大将」か」は現在の「うつほ」の本文は「春日詣」「吹上・上」「祭の使」の三つの巻で、正頼等の官位が左右逆になつていふことが、単なる誤写ではなく、物語の表現であることを論証する。第三章「内

侍のかみ」の巻の錯簡をめぐって」では、錯簡があったのなら意味不明の文が生じる筈であり、「錯簡」というよりも原型本の編集者による意図的・積極的な書き換えとする。第四章「うつほ物語における複本文化現象について」あるいは、絵解論序章「—では、従来絵解とされていた箇所を物語の時間、あるいは場面を重複させて別の観点から描いて行く『うつほ』独自の方法として捉え、このような箇所を〈複本文〉と位置づける。

以上内容の通覧のみだが、本書で展開されている論は「うつほ物語全」での注釈と不可分の関係であるように思われる。

(平成八年二月二十九日刊 A5版 四四〇ページ 若草書房刊)